観察 Observation

トラップに入ったバッタ

モンゴル実習で思ったこと

野生動物学研究室教授　高槻成紀

モンゴルでは 2002 年以来調査をしているが、このところはブルガンというところで放牧圧と生物多様性の関係について調べている。今年のモンゴルでは 7 月に予備調査をおこない、8 月に本調査をした。本調査には研究室の 3 年生 4 人に参加してもらい、調査を手伝ってもらった。調査内容からして、これを「牧場実習」と位置づけてもらうことができた。2 週間、寝食をともにすることで、研究室ではできない経験をすることができ、学生の考えや行動を知ることもできた。以下にはそのうち記録すべきと思われることを書き留めておこうと思う。内容は個人的なことに言及するので、敢えて匿名とする。

ひとつは体調管理のことである。私の見たところ、4 人の学生の体力は A、B、C、D の順と思われる。ところが調査における「実働力」は A, D, B, C の順であった。ただし D と B とはほとんど違いがない。

A は日ごろ体を鍛えているので、当然であるかもしれないが、しかし食事には細心の注意を払い、乳製品などは食べないようにしていたことは注目される。

B は基本的に体力の地力があり、これといったトラブルはなかったが、不調があっても気力で克服し、またそれが可能な体力があるようだった。性格的に陽気で豪胆ともいえるようなふるまいをするにもかかわらず、周囲に配慮しすぎて、それが体に無理を強いていた。地力があるので持ちこたえていたが、普通の体力の人であれば、ダウンにしていたと思う。

野外作業をする学生

C は、体力は十分にあるが、消化器系が弱いようだった。といってもそれは十分に平均的なものと思われる。しかし C はおなかを壊して下痢をし、実質的に実習にほとんど加わることができなかった。下痢の原因は不明だが、アイラグ（馬乳酒）が一因になっていたようだ。C はアイラグがおいしいからといって初めてであるにもかかわらずかなり飲んで下痢をした。そして一度回復したあとも再び飲んで、その後回復せずに 5 日ほどを寝込むことになった。そのことは気の毒なことであったが、その間中「もう大丈夫」といって外に出て体を冷やすなどして、再び寝込むということを繰り返した。振り返れば、最初にしっかり直しておけが、後半は回復できたはずである。私も他の学生もそのようにアドバイスしたが、徹底しなかったことは、われわれにも反省の余地がある。

D は一番体力がなさそうに見えたが、結果的には実習で大いに学んだだけでなく、B とともにモンゴル生活を楽しんだようすだった。性格的におおらかで、マイペース、

何でも楽しんでいるようであった。作業は決して楽なものではなかったが、しかし 7 時半に朝食、例外的な一日を除けば夜 8 時過ぎには作業を終えて自由時間になるというものであったから、過重とはいえない。D はある日、「寒くて眠れなかったので、今夜は小屋に移っていいですか？」と聞いてきた。これは一見「勝手な要求」にも思えるが、ほかならぬ体調のことを正確に伝え、よりよい健康管理を選んだことで、体調不良を回避することができたので、適切な判断であったというべきであろう。D は実習後に訪問した国立公園で風邪気味になったが、このときも早めに休んで、翌日には回復した。このときの判断も、上記と同様である。

調査のあいまに昼食をとる学生

以上は個人の評価をするために書いたのではない。この 4 人のキャラクターは個性的であり、多くの学生にとって自分はこの人に近いという参考になると思ったからである。この比較から私たちが学ぶべきことは、野外調査で大切なのは、自分の体力や性格をよく知り、状況を正しく捉えて、事前にトラブルを避けるということである。言うまでもなく、これは何も海外調査だけのことではない。

第 2 はモンゴル体験ということである。調査はチョロンさんという牧民のゲルに泊まっておこなった。日本人とは大いに異なる生活様式を体験したことは学生にとってよかったと思う。最後の夜に学生がチョロンさんに一言ずつお礼を言ったのだが、おもしろかったのは、調査の内容や動植物のことではく、モンゴルの人のやさしさや暖かさに言及していたことだった。私たちの世代には、モンゴルの人情がかつての日本を思い出させ、懐かしく感じられる。決して今のモンゴルが特別なのではなく、むしろ日本の人情のなさのほうが特殊なほどになったのだと思う。このことは私たちが国際人として外国の人とつきあうときに十分に配慮しなければならないことだと思う。

第 3 は実習というものについてである。実習は自分が知識や技術を習得する機会だと位置づけている人が多いだろう。というより、それ以外にどういう位置づけができるだとうと思うかもしれない。しかし大学の実験室でおこなう実習とは違い、共同生活をしながらの野外実習では、その共同生活の意味を学ぶこともまた大切なことである。ある意味では学習としての実習内容よりも重要であるといってよい。

共同生活をしていると、その人の育った家庭が手に取るように見えることがある。私自身、恥ずかしく感じることが多いが、箸の上げ下ろしからベッド周りまで個性が表れる。そうした日常生活や実習作業を通じて最も大切なことは、実習で自分が学習上の何を学ぶかだけではなく、実習生活で全体にいかに迷惑をかけないかとか、自分がほかの人にどれだけ配慮できるかということである。体調を崩すこともまったく同様である。通常の実習であれば、不調のために休めば「実習で学べなくて損をした」だけのことであるが、野外調査の場合には、全体のブレーキになる。個人の体調管理は全体の調査の成否につながるのである。このことについては、モンゴルの人が他人のために働くのは驚くべきことだ。それも決してわざとらしいのではなく、ごく自然にそうするのを見て感心したことが何度もあった。

今回のモンゴル実習はそういうことを認識するという意味でもたいへんに有意義なものであったと思う。

夜の作業をする学生（左は佐藤さん）

最後に付け加えておきたいのは同行した帯広畜産大学の佐藤さんの印象である。彼は最初の夜、麻布大学の学生は向学心があってすばらしいと語った。私もある程度そう思う。しかし、数日経つと少し評価が変化した。学生の会話の内容が先生をはじめとする、他人の噂があまりに多いということだった。また向学心はあるようだが、覚えることに熱心で、考えることには関心がないようだとも言っていた。これらは、私が麻布大学に来て強く印象づけられたことでもある。

麻布大学内にいると気づかないことだが、明らかにその傾向がある。なぜそうなるかを考えたが、ひとつはもちろんまだ若くて調べるよりは学ぶことに関心が強いということはあるだろう。しかしそれ以上に、授業の内容が盛り沢山すぎて、それをこなすことに汲々とし、疲れ切っているのではないか、というのが佐藤さんの – そして私も同意する – 分析であった。佐藤さんのことばを借りれば「悲鳴」のようであるという。覚えることと考えることは相反するものなのか、覚える能力と考える能力とは両立しないのか、私には判断がつかない。しかし若い学生が、サラリーマンが酒の肴に上司の陰口を言って鬱憤を晴らすがごとく、先生のうわさをするのは感心できることではない。私にいわせれば、そんな暇があったら、自分と自然との直接的関係を考えるほうが、よほど意味がある。もし麻布大学の教育体制がそうさせないものであるとすれば、それを改善する努力はする価値のあるものだと思った。

++

再発見

動物応用学科 4 年　立脇隆文

「あ、ハクビシン！！」７月の終わりごろ、自宅付近でハクビシンを見かけた。あたりは暗く顔の白線は見えなかったが、あの尻尾の長さや足の短さは紛れもなくハク

ビシンだった。私の自宅があるのは、横浜市のはずれのほうで、田舎といえば田舎だが、木はあまり多くなく、基本的には住宅地である。こんなところにもハクビシンがいるというのは驚きであった。というのも、私は物心ついたときから同じ場所に住んでいるが、野生動物を見たのは小学生の時に見たタヌキの死骸以来であった。しかし、それから何年も野生動物の痕跡を見ることはなく、自宅付近には野生動物はいなくなってしまったのだろうと思いこんでいた。そんなときにハクビシンを見かけたのだから、大いに驚いた。それで、家に帰ってからの第一声は、「すぐそこでハクビシン見た！！」であった。ハクビシンは外来動物なので、手放しに喜ぶことはできないが、自宅の周りにも野生動物が暮らしていける環境があるのだとわかり、うれしかった。

ハクビシン目撃を期に、自宅付近の環境の見方がガラッと変わった。自宅から駅までの移動時間は動物の痕跡や彼らの食べ物を探す時間になった。今までそこは駅に行くまでのただの通り道で、気を紛らわすためにイヤホンをつけてしぶしぶ自転車をこいでいた道であったことを考えると嘘のようである。自宅から駅までの約２０分。その気になって探してみると、住宅地といえど意外に多くのものが多く見つかった。畑についている何者かの足跡、いつも放置されているゴミ、庭に植えてある果樹（カキ、ザクロ、ビワ、いろいろな大きさの柑橘類）、トカゲ、セミ、秋の鳴き虫。

「今までの目は節穴だったのか！？」

そう思うほど、２０年以上見てきた地域に多くの発見があり、驚いた。

自宅の周りを見ながら、大学周辺を思い浮かべてみる。すると、矢部駅周辺でさえも野生動物の気配がしてくる。矢部駅近くの大きなビワの木、銀杏をつけるイチョウの木、野良猫用に用意された餌…どれもハクビシンやタヌキにとって食べ物であるに違いない。彼らが人間を気にせずに住める林はないが、食べ物はあるようだ。実際に大学周辺でも野生動物の交通事故は起こっている。やはり身近な場所にも野生動物はいるのである。

そう考えると、いつも見ていたものも違って見える。野生動物というのは人間から遠く離れた森の中に暮らしていると思っていたが、実は人間の身近なところにも住んでいるのだ。

彼らはこの町でどのように生活しているのだろう。何を食べているのだろうか。どこが彼らの「家」なのだろうか。「平成タヌキ合戦ぽんぽこ」のように、人に化けて町を人と同じように町を利用することはできないだろうが、彼らなりに上手に町を利用しているのかもしれない。こんなことを考えながら町を見るとなかなかおもしろい。

++

自分の課題と生物多様性について思うこと

動物応用科学科3年　倉田直幸

つねに頭の片隅にある疑問について書いてみたい。その疑問というのは自分の研究の意義、もしくは目的といったことについてである。つまり、自分の研究をおこなうことによってどのような応用が出来るのかということだ。

私の研究は、移動範囲の狭い地上徘徊性甲虫を植物群落ごとに捕え、その個体数や種数を見て、甲虫の種類ごとの生息地選択を比較するというものである。群落ごとに種の違いが見られるようなことがあれば、様々な植物群落をパッチ状に配置するのが多様性を維持する上で望ましいと結論付けることができる。

実はこれは自分で考えたのではなく、これまで発表された論文からの受け売りであるが、自分の研究の目的もそこにあると思った。この説明はとてもわかりやすい。目的が明らかだと研究に対する意欲も湧いてくる。

地上徘徊性甲虫は落とし穴トラップでつかまえる。トラップを仕掛けてすぐはあまりうまくいかなかったが、トラップの数を増やし、埋め方を工夫してみると、虫がトラップにかかり始めた。うまくいったときはとてもうれしく、

「めっちゃ入ってんじゃん！」

と声に出してしまった。調査地である公園を訪れた人に怪訝な目で見られようと、私は虫を捕り続けた。サンプルが増えるにつれて、充実感を覚えた。

そうする過程で根本的なことについて改めて考えた。

「生物多様性はなぜ維持されなければいけないのか」

これは専門ゼミで高槻先生から学生に問いかけられた質問である。輪読の最初のほうで農業害虫について考えていたとき、「生物多様性の保全は必要だというが、人間に害しか及ぼさない虫は守る必要はないのではないか。」と問いかけられたのだ。私は即座に否定することができなかった。

私はそれまで、漠然と多様性というものは守るのが大前提だと思っていた。しかし、改めて問われると、もっともらしい答えは浮かんでこなかった。「いなくなるのはかわいそうだから」というのは、あまりに情緒的で説得力もない。他の学生も私と同じだったようで、この問いかけに対して皆だまったままだった。生物多様性保全の意味がわかっているようでわかっていなかったのである。

何冊か本も読んでみたが、「かわいそうだ」の類のほかには、「後世に伝えるため」というのがあったが、どうもしっくりこない。

今の私にはしっかりとした説明はできていないが、ひとまず生物多様性は守ったほうがよいと自分に言い聞かせている。自分の調査していることが、どういう形で生物多様性保全に貢献できるか、これからも考え続けたいと思っている。

++

動物園ボランティア

動物応用科学科3年　多田美咲

毎月2回、多摩動物園でボランティア活動をしている。活動は、「サバンナ」という、キリンやシマウマ、ダチョウなど7種類の動物が展示されている放飼場の前で行い、来園者にキリンの毛皮やダチョウの卵をさわってもらったり、足跡クイズや様々な解説パネルの説明をするものだ。

「サバンナ」は、メジャーな動物が多い人気スポットであり、たくさんの子供がやってくる。なので、活動中に相手をするのは8割が子供である。質問をしてくる子、親の影に隠れる子、私に色々教えてくれる子、毛皮や卵を怖がる子。クイズの答え合わせをすると、「おれ、知ってたよ。」と言う小学生の男の子もいる。今まで子供と接することがあまりなかったので、このような経験は新鮮だ。私は子供に対する環境教育に興味があるので、この機会に、子供相手に動物の知識や自分の考えを伝えられるようになりたいと思っている。

子供たちにとって、実際にさわってみることや、ちょっとした知識を増やすことは、大事な経験だと思う。でも、私が一番大切にしたいのは、動物をよく見ることだ。クイズに夢中になったり、毛皮に目を奪われたりすると、子供はなんでもかんでも聞きたがる。そんな時は、「よく見てごらん。」と言ってみることにしている。

動物を見ること。動物園なのだから当たり前のことだが、実際は、写真を撮るだけでさっさと通りすぎていく人がとても多い。これは、月2回動物園に行くようになって気づいたことだ。「本物の動物がいるのに、それを見ないのはもったいない」と私は思う。ところが、今年、旭山動物園に行った時は、自分が写真を撮り歩いてしまった。なかなか行けないとおもうと、つい記念に撮ってしまうのだ。ほとんどの人にとって、動物園とはそういう場所なんだろうと思う。今は動物園ブームで、テレビなどでも可愛い動物特集をやっている。そんな中で、動物をよく見ることは、少し難しいことなのかもしれない。

だから、私は、このボランティアの活動が、動物園に来た人が動物を見るための手助けになれば、と思う。そして、動物を見て、動物のことを考え、人と動物のことを見つめ直すきっかけになればいいなと思う。

++

編集後記

売れっ子の養老孟司さんは長いあいだ、嫌いだった。「頭のいい人はこういう難しい文章を書いて、読者を煙に巻くのか」というのが評価だった。実際、彼が 40 代くらいに書いた脳に関する本などは難解のきわみで、そのことを楽しみ、「分かる人に分かればよい」と言いたげで、私は不快だった。ところが、偶然手にした最近の著作（「脳あるヒト心ある人」扶桑社新書）を読んで、驚いた。実にわかりやすく、本人も書いているが、歳をとって難しいことを書くのが面倒になったらしく、要するに素直になっている。もちろん大変な才子であるから、内容は深い。深い内容をむずかしく書くのは珍しくないが、それをやさしく書いてこそすばらしいと思う。その本の中に「自分を変えない知識はあまり意味がない」という言葉があり刮目した。続けて「学ぶなら自分が変わるまで学びなさい」ともある。私は、このことは「勉強」と「研究」の違いを言っていると理解した（このことは 6 月号の「シンクとソース」に書いた）。立脇君の文章を読んでこのことを思い出した。高槻